

中国戦線の思い出

原 健治

新井四丁目

その一

中野駅北口で毎日通りがかりの人々に献血を呼びかけております。あれを聞くと戦地の病院で入院中の事を思い出し、ついホロリとなります……。

昭和十八年十月の中旬、中支の沙洋鎮の病院に入院しておりました。その直後第三次常德作戦が始まりました。その頃その戦闘に参加した通過部隊の人が入院して、私の病室に入ってきました。

入院してから間もなく、私の事を「原さんはいいなア、輸血して貰って……。俺も輸血して貰いたいんだ」と叫んで羨んでいました。

私の部隊は、病院から徒歩で二〇分程の所にありましたから、毎朝一人か二人が輸血に来てくれました。私がお礼を言いますと、「いいんだ、いいんだ、楽しいんだ。お前の所に来ると、毎日、輸血に行った者は誰だと言われ、輸血に行った者には特別食として牛乳は飲ませてくれ、卵は一つくれ、楽しいんだ」と

言っていました。先ほど叫んだ人は通過部隊の人なので、本隊は近くになく、又病院の人々は輸血はしないらしいのでした。だから誰も輸血する人はいなかったのです。

輸血が欲しいと叫んだ二、三日後の夜十一時頃、その人は突然、蒲団から抜け出し、蒲団の上に座り、東に向かって頭を下げ、幽かな声で「天皇陛下万歳」と叫びました。同室の二、三人の者はびっくりして、「おい、ふざけるんじゃないか」とか「馬鹿な事をするんじゃないか」と怒鳴りました。

その翌朝その人は既に死んでおりました。すぐ病院の庭の隅に運ばれ、焼かれました。

私は先に述べましたように部隊が近く、毎朝輸血に来てくれましたが、この通過部隊の人には、輸血をしてくれる人が誰もいなかったのです。本当に気の毒で可哀相でなりませんでした。

その二

昭和十九年十月中旬、南満州の病院を退院し元の部隊に戻ることにになりました。独り転々としながら漢口の連絡所に到着し

たのは十一月の十日頃でした。

到着した時、偶然にも私と一緒に入隊した同年兵の練馬区出身の中島君がいました。二人はうれしくて手を握りしめて喜びました。

彼も漢口近くの病院に入院していて、私がここに到着する二、三週間前に退院してここに入っていたとの事でした。私が病院を退院する時たまたま持っていた十銭のキャラメルを「よかつたら食べなよ」と渡したら、涙を流さんばかりに喜んでくれました。

彼より私の方が二歳くらい年上でした。部隊内では我々が新兵ですから、古年兵には何かときき使われました。私は中島君と呼びましたが、中島君は私の事を「原さん」「原さん」と呼びました。それが古年兵の耳に入り、「馬鹿、中島、同年兵の原のことを何故、『原さん』と呼ぶんだ。『さん』を取って『原』と呼べ」と言って殴られました。

三、四日この連絡所にいましたが、連絡所を閉鎖して連絡員の全員十五人位は桂林にいる本隊に合流することになりました。

十五日、桂林に向かって出発。トラックに乗ってです。我々の隊の外に隷下隊の大野部隊の一部も一緒に行くのです。そしてその隊には慰安婦も十四、五名くらいいました。聞けば南方に慰安婦がないとかで、よって彼女等も同行させるとのことでした。

今日最初に着く宿泊地は、「まきよう」という所です。「まきよう」と聞いて、いやな名前だなア、いやな所だなアと思ひ、不吉感が湧いてきました。一方、今日は内地では七五三の日だなアとも思っていました。

そして暗くなつた頃「まきよう」に着きました。間もなくすき焼きを食べ酒を飲み、おしゃべりをして夜食は終わりました。翌朝古年兵が「我々はまきよう温泉に行くから、原と中島は後片付けをし、留守番をしてろ」と言つてトラックに乗つて出発しました。

残された二人はどうしようかと相談しましたが、私は「君の考えどおりにするよ」と言いましたら、中島君は、「僕は残つて銃剣の手入れをするから、原さんは悪いけど、昨夜の夜食に使つた食器類を洗つてきてくれませんか」と言いました。私は、「ああいいよ」と言つて、両腕に昨夜使つた飯盒等の食器を抱え、五百メートル位先の川端に行き、藁や川砂を使って油をおとし、綺麗にして又両腕に抱えて帰つて来ました。

そして入口まで来た時、「パン」という音がいきなりしました。何だろうと思ひながら扉を開け中に入りました。

その時の驚きといったらありません。中島君は壁により掛かり、銃を抱え、銃口を顎の下に置き、右足の親指で引金を引いていたのです。頭はやぶれ、壁には血と脳髓がついていました。

私はあわてて中島君の手を取つて脈を計ってみました。脈拍

はまだありました。しかし間もなく脈拍はなくなりました。

そして漢口から一緒に行動して来た大野部隊の人に話して、「今私の隊の人達は温泉に行つてますから連絡して下さい」と頼みました。

その間私は何か遺書はないかと中島君の持ち物を捜しましたが、ありませんでした。軍隊手帳が出て来たので、何か書いてないかなと思つてめくってみました。そしたら手帳の中に書いてありました。読んでみたら、ちょうど私が漢口の連絡所に到着する十日位前に空襲があつたらしく、その時防空壕に入り、真つ暗な中で書いたらしくて字は大小入り交じり、とても読めませんでした。判読してわかりました。

「母さん、先にゆく僕をゆるして下さい。とても、いじめの多い軍隊生活には耐えられません……」と。

私はこれを見て本当に涙が出てとまりませんでした。我々は遠く祖国を離れ来て、敵と戦っているではありませんか。敵と戦うためには、我々日本人は一体となつて助け合い、かばい合うのが本当なのではないでしょうか。それを人の良い穏やかな新兵だからといって苛めるのは言語道断ではありませんか。戦争とは敵と戦う前に味方と戦わなければならないのでしょうか。

そしてその夜、火葬にいたしました。遺骨は私が抱いて桂林に行きました。

中島君の冥福を祈ります。

